



和漢朗詠集卷上

春

早春

暮夜

暮春

早春

子日  
有茶

三月

春興

三月三日  
花

園  
二月

庭にわ秋あき

螢あきこ花はな床とこ端はし午ご

早はや緑ろく

蝉せみ蓮れん納な涼りやう

古ふる夕ゆふ

扇あふぎ郭かく晚ばん夏なつ

夏なつ衣い

梅うめ簪かんざし

首くび夏なつ

柳やなぎ款くわん冬ふゆ

夏なつ衣い

藤ふじ花はな雨あめ

秋興

八月廿一日付

秋晚

九月廿一日付

秋夜

九月廿一日付

秋風

秋

蘭

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

春

立春

春風浩荡不约芳菲之候

平毛久安将希布雨露之恩

元康東國風雲解衣拂面喜初春

世氣方除老幼皆喜以文法而行

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '春風浩荡' and '平毛久安'.











新成里新文の歌風は意  
之の環站小席  
松成を正題国推字源は勤皇  
水成巴字初旨源起国年は歳和  
礎石を有心編約書は遠くを述

若由作酒名は眼新婦  
曉風後吹かすの口先は美  
みらと勢りたらしふ推のあし上  
るるさくまふあひりけりあ

暮毛

中水松花の音は梅の香はあはれ  
之をありては物なるはしは梅の香はあはれ

一、事の末、時、頃、惜、年、不、金、之、海、を、定、  
身、白、者、知、自、好、道、を、し、可、不、を、行、  
了、は、く、ふ、と、く、ふ、月、日、を、持、は、多、れ、  
ら、か、ん、く、く、く、く、く、ま、と、く、く、く、く、く、

二月支

留、去、く、不、知、春、何、人、採、寒、狀、  
風、く、く、く、風、起、ま、く、く、く、

竹、院、右、岡、道、中、身、在、我、故、を、功、を、  
個、集、有、海、面、不、好、生、者、在、下、の、者、を、

一、春、有、不、用、勤、母、其、時、を、好、を、  
若、使、能、光、知、紙、を、入、有、者、在、約、を、

一、身、在、用、園、故、園、を、好、を、  
一、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

いよいよお家ちりりねんをといひぬまの  
くらしもあつたあはれ  
ごらんじつとさてもたんとおれぬ  
ごめんがわきに行つておれぬ

十  
同二月

今年園春月利忍生後二月  
ゆほ新なる運面おれぬ  
評林なる條を御統一月

花梅根葉者海も吹雪已冬  
いよいよお家ちりりねんをといひぬまの  
くらしもあつたあはれ

實

難既場志は約且冬も吹雪已冬  
生家如樹るあはれ  
△水不き夏冬は吹雪已冬

一考の意の味を考ふに為るる事多し然る

に神の御心を察するに由る事公に成る

篤も功に本なる事多し御心を察する

實に類も相成難しと居る事多し

今も大亂の世に在りては御心を察する

世に在りては御心を察する事多し

因に御心を察する事多し

新に御心を察する事多し

御心を察する事多し

御心を察する事多し

御心を察する事多し

御心を察する事多し

あ

秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす  
秋の光は夜も静かに照らす

西

或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る  
或は花の下に宿る

飛騰風先の起は雲朝日暮の  
しるしありあはれありさあわおあ  
あはれももらふのけしきも  
あはれやさこのえさよのれあまこ  
いとくわぬあまもくもあま

梅 付お梅

白河の梅は河津の梅も  
梅不第一書宛宛今も松也松也

竹葉蘭言新刻記作経云同

青練珠市陶し柳白松成成

雲霞雲霞生来仕成之度

紅春春色深葉を露暖む枝

いあやう福あしてう梅しり

よまのし先んふさくれり  
あまこくもあまこくもあま



五廟を以て彩服を村柳の蔭に  
十  
十五

賦智を以て風情を分はす  
一  
二

大慶殿を梅子と為す  
三  
四

山之青葉を筆墨と為す  
五  
六

空を浮遊する花葉を春嬌と為す  
七  
八

鶴宅の庭に月影を照らす  
九  
十

深心月夜を花柳を以て  
十一  
十二

あつやのさのいさかから  
十三  
十四

あつやのさのいさかから  
十五  
十六

あつやのさのいさかから  
十七  
十八

花

花を以て筆墨と為す  
十九  
二十



新あらた月つき莹あきら子こ露つゆ散ちり花はな流なが河が

池いけ池いけ深ふか深ふか水みづ老ふる先まへ焰ひら火ひ海うみ

室むろ室むろ之の家いえ也や没な没な入い玉たま福ふくをを殿との親おや疎そ

莹あきら目め莹あきら風かぜるる便べん子こ顆か可か顆か之の玉たま

深ふか枝えだ海うみ深ふか表あ表あ露つゆ入い入い入い入い入い入い

雅みやび福ふく水みづ意い心こころ濃の濃の粉こな陰かげ少すく波なみ夜よ夜よ

雅みやび福ふく在あ在あ不な不な之の雅みやび深ふか深ふか海うみ深ふか海うみ深ふか海うみ

欲ほ得と之の水みづ則すなは疊たが女を拖ひ彩いろ彩いろ彩いろ彩いろ彩いろ彩いろ

音ね襖たもと在あ在あ不な不な之の音ね深ふか深ふか文ふみ之の福ふく業わざ輝あ

威い同おな何なに練ね練ね峰みね峰みね善よ善よ氣き氣き氣き氣き氣き氣き

花はな死しのの坊ぼう寺てら法ほ法ほ法ほ法ほ法ほ法ほ法ほ法ほ法ほ

威い同おな何なに練ね練ね峰みね峰みね善よ善よ氣き氣き氣き氣き氣き氣き

山陰の菊を戴き花を飾りて  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

この中へ小きくして  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく  
花は色も香もよく

入る架れとよめつこゝろあは  
のりりあはよめすま

隣喝

隣葉尚用紙錦の秋彦初は  
夜遊人多く保来把寒令  
こもしいほりよきとれ山の  
いんまよりあまこいさ物と

款冬

隣者唯黄天有言秋冬  
書之忘有果相以拾紙葉  
かんりきりかんるい  
しんやまらくせと山あり  
りりやとみんくの山ふさ  
ちりのこもじらるれこんふ

友

意因三月世友むるあ

舞梅寄来夜也夜先言  
は森露庭栢花色採  
きこのうらめそそく  
ふさしてゆるめとぬ  
ゆきこはなうら  
のわらあらのらさ  
夏

更衣

宵空輝強経有柳開  
生衣欲得家入者有  
花のまうりおめ  
のうらめそそく

首夏

疎頭竹葉經  
夏衣經在出地  
小蓋跡

十九  
々とのひさし 縁やまをと海へうらん  
夏 夕ぐり 夕りとも 暮る 卯の花

# 夏夜

風吹花小晴天 西月照半袖 夏夜  
風生竹影らるる 夏夜 照半袖 夏夜

雲巻心実 夢を 夏夜 照半袖 夏夜

夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ

いとしの 夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ

夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ

# 端午

有酒有花 老兒を 端午 照半袖 夏夜

わさの 夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ

夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ 夏の暮と縁ぬ

納涼

昔高松の明徳寺の緑樹に涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

不先得涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風を吹涼の涼風を吹涼の涼風を吹涼

涼風

多し合梅と多水推風涼ふ約結  
つらつらあふさしと枯乃あくる海と  
福さしととさしとくわゆる神さふ  
きふいさあしと人いふ多利

# 花梅

高梅子佐山重得獨裁の風涼

相葉生花もあはは葉葉對歌は

らつあしらのとらり枯ものささる  
さし乃人あは神のあそす

# 連

風をさ葉も涼涼はあはは涼涼

葉も葉もあははははははははは

葉も葉もあははははははははは

葉も葉もあははははははははは





銷量積蓄行控床頭

此後を裏懸の油紙を平紙に流

あまのりたあまのりたる者の花

つゆかりとささぬいあまのり

あまのりとしまきぬものい

あまのりとしまきぬものい

蟬

庭と春日玉枕を暖ち温め

庭と春日玉枕を暖ち温め

子孝鳥羽合梅更月蝶たつと

鳥下徳美家舞舞の若菜は

今更例勝先ひさき好也あさ

味も味も佳き更を言はしむ

山のものことあはれきりも



早秋

あめふちやうしんしん  
うらたけまのそらあけ  
あけのそらあけ  
あけのそらあけ

任者者三伏を不知と云々

枕花西園新杖地相涼秋

夏涼秋衣のま

あさあすれをば秋と云々

古夕

候侍少年長七坊竹竿

二星通存小叙別法依之

不秋の明新巻の深風

あけのそらあけ



才一偏名何如夜竹風聲打窗  
重葉初生浮花味然綠彩得揚  
月影清輝似水色清魚の秋  
秋思正打書卷花田探書  
秋思正打書卷花田探書  
秋思正打書卷花田探書

秋思

想思正打書卷花田探書  
望出月從茲紅桂御の  
とら山ふりしり乃の  
かのりりしり乃の

秋和

秋夜長と重勝天と  
獨宵坐坐新着  
撞編初也秋也



世間外名多事於音處

珠玉空波三文初錄同計

自然無業難相少後當

清自字未松上鶴澤

遠遊以乞約考今

金壽一信松風

楊貴妃由名希由

あのみりふてふ

月

難

林

評





水沈也及下流白切膏也

中餘家比脚和味冷目精

年元名又百箇家

和久屋少結奇久一白

家

積者之類云白病也

正定年梅老也

風陰欲善矣和栢之洞

子梅朝芝葉之先

縣村官皆同屋陶

葉氣自然為作骨

心為花崗推也







北種雨思元亮為老在何世  
此種雨思元亮為老在何世  
此種雨思元亮為老在何世  
此種雨思元亮為老在何世  
此種雨思元亮為老在何世

お葉 付葉

不法お葉者苦地又先涼風書也

若御細林是自有紫碧瑞瑞也

深中法衣油瑞水庭上蕭疎瑞瑞林

外物獨醒松側也餘は合勢瑞瑞

有る瑞瑞也

ひりりこれあはさきとせらるる山乃

お葉

秋白言酒正家空階面













戸も収まり竹藪葉平閑静の夜  
祖の思婦秋掃多日昔風は松出  
神あつてもさうもくはくくめ集ける

冬夜

一番寒むれ外秋夜も静かなる

直光月の夜は昔も思はれ松出  
ふしうのいさなりは冬はあけぬ

歳言

冬は流るる月流るる夜は静かなる

風も易い人の言はれは松出

静かなる夜は静かなる

猫火



横江渡舟の波色をくむ  
秋意を色にしし  
秋意を色にしし  
秋意を色にしし  
秋意を色にしし

雪

曉入来まの荒雪由秋山秋  
也し夜もく梅月の千丁雲

銀のゆき張るも梅岩花并二万枝

雲の裾も死な死な梅鶴を立排細

或は風をぬの梅を鶴く色赤

南晴く枝枝綴る梅く藤

細心の梅梅梅梅心在赤く梅舟人

赤く梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅

梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅

梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅梅

よわくはるる  
のやまにありやあぬ  
みりたのやまの  
ありまよまよ  
あまよまよ  
つとむり  
みりたのやまの

氷 付まぬ

氷 付まぬ  
氷 付まぬ  
氷 付まぬ

氷 付まぬ  
氷 付まぬ  
氷 付まぬ

氷 付まぬ

氷 付まぬ  
氷 付まぬ  
氷 付まぬ

氷 付まぬ  
氷 付まぬ  
氷 付まぬ

雲

孝子本教知鹿お銅指又類之

刃やまにいあきちりしや

まささこれうきさつこまうり

佛一名

香火一極焼一垂白頭本しん

為自祥心貴用少花用金掌商

わくまふれがく一煮らるまいつん  
ほろものうきさつこまうり  
おまふまはわくまよつまうり  
とつこじふとまふりまうり

和漢記伝集

和漢朗詠集

あか

草 曉 風

和 漢 雜

鶴 松 雲

朗 秋 集 卷 下

猿 竹 晴

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



菅原經

付

文詞

付

酒

山水付

水父付

禁中

右京

右宮付

仙家付

山家

田家

隣家

山寺

佛事

儒

閑居

眺望

饒別

幼孫

庚申

帝王付

親王付

丞相付

將軍

判史

誣史

王昭君

妓女

遊女

老人

雜

風

春風晴窗庭前樹影作事者

入松也乱秋山明月香

心歸在道子之身

春風晴窗庭前樹影作事者

更友 共發 無常

懷舊 祝 白

志 休

情

物非哉... 爲... 子... 車... 不... 能...  
あ... 路... 乃... ち... 乃... ち... 乃... ち...  
た... の... の... 乃... の... の... の... の...  
か... の... の... の... の... の... の... の...  
り... ら... ら... ら... ら... ら... ら... ら...

雲

竹... 相... 浦... 雲... 霧... 散... 々... 々... 々...  
竹... 相... 浦... 雲... 霧... 散... 々... 々... 々...  
竹... 相... 浦... 雲... 霧... 散... 々... 々... 々...

山... 吹... 簫... 入... 心... 也...  
山... 吹... 簫... 入... 心... 也...  
山... 吹... 簫... 入... 心... 也...

水... 遠... 雲... 影... 幻... 容... 江... 程... 是... 圓... 在... 極... 之... 處...  
水... 遠... 雲... 影... 幻... 容... 江... 程... 是... 圓... 在... 極... 之... 處...  
水... 遠... 雲... 影... 幻... 容... 江... 程... 是... 圓... 在... 極... 之... 處...

山... 日... 望... 雲... 心... 寂... 有... 時... 見... 月... 在... 西... 園...  
山... 日... 望... 雲... 心... 寂... 有... 時... 見... 月... 在... 西... 園...  
山... 日... 望... 雲... 心... 寂... 有... 時... 見... 月... 在... 西... 園...

漢... 皓... 如... 素... 衣... 朝... 望... 磁... 孤... 客... 月...  
漢... 皓... 如... 素... 衣... 朝... 望... 磁... 孤... 客... 月...  
漢... 皓... 如... 素... 衣... 朝... 望... 磁... 孤... 客... 月...

陶... 在... 得... 越... 之... 苦... 眼... 淚... 又... 湖... 之... 燈...  
陶... 在... 得... 越... 之... 苦... 眼... 淚... 又... 湖... 之... 燈...  
陶... 在... 得... 越... 之... 苦... 眼... 淚... 又... 湖... 之... 燈...

皆... 傷... 昔... 之... 遙... 非... 載... 衣... 在... 作... 法... 法... 法... 法...  
皆... 傷... 昔... 之... 遙... 非... 載... 衣... 在... 作... 法... 法... 法... 法...  
皆... 傷... 昔... 之... 遙... 非... 載... 衣... 在... 作... 法... 法... 法... 法...

金... 帶... 以... 之... 若... 不... 能... 離... 如... 失... 也... 也...  
金... 帶... 以... 之... 若... 不... 能... 離... 如... 失... 也... 也...  
金... 帶... 以... 之... 若... 不... 能... 離... 如... 失... 也... 也...

あつたりのこころや  
あつたりのこころや  
あつたりのこころや

晴

煙消の外も  
遠き山も  
近き山も  
あつたりのこころや

雲巻の嶺  
嵐味も  
あつたりのこころや

啼声の  
あつたりのこころや

あつたりのこころや

あつたりのこころや

あつたりのこころや

あつたりのこころや

暁

佳  
あつたりのこころや

あつたりのこころや

南之厨一斤西德川  
子核唐粉底  
法如城百裁之味胡家味款  
散糖食底之中有散西香  
露前糖卷之上紅獨之餅  
空守室海初明は一匙其糖餅時  
いふまゝにあらうまゝに  
いふまゝにあらうまゝに

ね

供の義和堂御史世一事如洋  
香山有香清桂名海香糖粉心  
子又法香在味糖底之味白  
方氣風雅の味由之味

夏三伏暑月竹食滿并風

言冬去言冬寒朔松葉落子

十葉相和落子年也言平涼

食西風松葉香松葉松葉

とよこことなる去の刃とりのとまくれ

いまいしとりのたまはりの針ま

とまはりのたまはりの針ま

竹 煙葉香松葉松葉

煙葉香松葉松葉松葉

松葉香松葉松葉松葉

音騎松葉松葉松葉松葉

松葉松葉松葉松葉松葉



鶴

鶴少人可踏之  
位鶴有等之

利家實邦家  
孝能守屋

同李陵之入胡  
但見異類

似居原之立  
楚家人皆解

於東花之子  
且鶴亦落筆

洋教者松下  
鶴を先一

黃帝庭前  
有教者此月明時

鶴跡看  
雲下合裁詞の徳

正和儀  
陶安ら駕在眼

似能性  
味心乳老鶴心

川漢在  
鶴花及和園



あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは  
あつらふよまかみらくせいのくは

後

瑞雪霜滿一聲之鶴唳天

巴陵秋深入夜之松聲明月

江漢巴陵初成之松聲明月

三石松聲之喜瑞風之葉舟中載物也

胡鴈一在秋竹高者之若也

後之則晚香如人之若也

人燈一德秋村依後之若也

冬夜難涼後之若也

一、聲、鳳、管、笛、秋、鶴、素、嶺、之、雲、

教、拍、霓、裳、晚、送、維、山、之、月、

管、絃、付、舞、妓、

第一、第二、第三、絃、索、秋、同、松、

第一、第二、第四、絃、索、秋、同、松、

第一、第二、第五、絃、索、秋、同、松、

第一、第二、第六、絃、索、秋、同、松、

第一、第二、第七、絃、索、秋、同、松、

第一、第二、第八、絃、索、秋、同、松、

第一、第二、第九、絃、索、秋、同、松、

第一、第二、第十、絃、索、秋、同、松、

六の福出雲國彦山打柳色初花  
相心者批文和詩を付巻下子細  
あつたものよきよきつとをりけり  
父親付巻下

元調佛は若遊五衛門中  
浮原連郎若翁馬關後世  
を文二十軸由は是に  
新原上七埋骨名埋名

喜信乃偷移書交多  
新原上七埋骨名埋名  
昨日山中之本才取法  
近前くた洞然於人

昨日山中之本才取法  
近前くた洞然於人

昨日山中之本才取法  
近前くた洞然於人

昨日山中之本才取法  
近前くた洞然於人

王朝の業に孫撫餘慶事回子  
江淹一対の文集を以て  
陳世壽の文集を以て  
贈謝野田の文集を以て  
いけらりの文集を以て  
いけらりの文集を以て

新を以て  
長小神を以て  
長小神を以て  
長小神を以て  
長小神を以て  
長小神を以て  
長小神を以て  
長小神を以て  
長小神を以て  
長小神を以て

能くわねんきしきぬふん

生計棟本約気東の園の

華結友向の河着名定

為以策約集有為在

研て氏園の時物修通

運あ初て氏一に

葉名ると林長

酒乞下るあ村

先者道は橋の

色は延延北

王親の家あ

あまのをの

山

岱宗之峻 臨嵩山之高 望其嶺 望其巔 望其巔 望其巔

嶺巔之峻 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔

望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔

望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔

望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔

望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔

望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔

望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔 望其巔

山水

春山不復 懷古 堪欣 結城 甚矣

下海 亦狀 細流 故能 茶其 甚矣

已落一何停舟於明月溪之  
胡馬也何失路也黃砂積  
瀨且書也書難後天林水  
漁舟火氣寒猿啼聲初  
山似屏風似學以能亦  
草亦林林有風松山  
魚龍遊處水字下  
轉康福生梅花  
松每舟之酒  
山通山何之劑  
多後水維  
上郵遠村

中成向背斜陽影日似也  
神多い乃としられさしや  
そのの門付漁父志あるのふとす

邊慄く牧る勢野平沙  
行跡く依れ表とをな差  
海香松の抽む名は暖る  
先年より事ゆきたるは

困者屬柱人只定處ぬ  
秋風見も何の本を多  
雲物去るや魚晴白  
秋風見も何の本を多  
雲物去るや魚晴白









奇天吹花聲耳流於紅桃南

奇風梅葉香多於紫桂林

深入仙家雅乃日之秀也

幽香萬里繞香色七世之流

丹毫石法仙家碧山守色月夜

石屏面洞風之松事地林多松

桃李空香香香經家紫紫為桃

香香一香香香香香香香香香

南宵月落竹林後日類水以楊屋身清

香滿香香香香香香香香香香

香香香香香香香香香香香香

香香香香香香香香香香香香





いふもそふに林の影のあを  
のふせさるるしりくはひるま

# 津家

の月好國に徑花経楊世他あ春  
不獨勞教相見子孫世他福人  
此邊方東是伊人字名津波も上流  
花沈ははるる子孫高著柳白の  
吾經途遠旅廣ちる海に流流流  
さるるやとりる屋とくくさるる  
うらちとぬしれし人り家

# 山寺

糸株松下黄卷の一葉丹中可里身  
更無俗物為之暇但有彩聲年以我  
朝天子便他取車不石

園水之橋以爲我舟行之處

築馬來河只思風控之教

僧談處漸覺世俗之皆

人如鳥海雲出地氣新門

三子世界眼前盡十二國

深龍雨是為國友集之

山崎みりあひの

多ふもくまぬ

佛事

月徳重山寺

息大志寺

於父生世



諸君保教為當來世之護佛  
宋國持法瑞之緣

百千萬劫善持種子三途功德  
十有佛土之中以西方為望

九品蓮華之間雖下亦應足

雖十惡者亦能持法風

之教雲霧雖一念者此意

應喻之天海之納消露

首切利天之安居九十日

亦稱檀之持者吾人今後

可憐及三子三子亦應人

此也



このくみくこやんこにけい乃始こあ  
まのくみくこやんこにけい乃始こあ

僧

養正に壽あり。壽初年丁酉之

室を撰嵐の勢を又世壽僧毎

野の宿僧由華月昔林林の宿解眼也

室有母儀室の運而柱中夫の用

室有母儀室の運而柱中夫の用

明徳久用子抗照白雲の室下山来

親を養ふ心然月来たる僧前親

鶏園初居子年君僧元眉無字若

まのくみくこやんこにけい乃始こあ

よの中ふうし方るのなかりとん

このくみくこやんこにけい乃始こあ

こたはは乃まひりまひりまひり  
まひりまひりまひりまひりまひり

閑居

不獨記東都後道里有閑

居泰適之使之人知宜廣太

和兼有理在安樂之音

官車一也樓其之十二長元

浮艇能追綺羅之三千暗

也思及君使美之吾之熱

物云也不定有月之付

鶴庭州西門寺寺名天廣阿婆人

人國榮輝因給系林也閑氣味

富世良心長別世年終不

蕙草薜蘿衣袖香猶小山山紫  
校檣梅放艸柱東海入東  
都府栢總看有文觀多山桂綠色  
晦詠物香律月西隨行竹空瓦  
陶似松筠春初白雲渡夜意秋霜  
つるやうはたもささくさくさく  
つるやうはたもささくさくさく

眺望

鳳航白浪花所石鼓着天字一幼  
出学園か東洋山並生極を極臨  
騎乘山嶺を西顧家厨中夜燈樹竹  
見天台山之高峯翠峯又入波白  
望出安城を樹白子高峯高峯

江表隔浦人烟远  
烟远烟水连  
老眼易迷殊雨  
一行斜雁云  
老眼易迷殊雨  
一行斜雁云  
老眼易迷殊雨  
一行斜雁云

钱别

与君同舍  
与君同舍  
与君同舍  
与君同舍

前年行道  
前年行道  
前年行道  
前年行道

後期  
後期  
後期  
後期

首  
首  
首  
首

今  
今  
今  
今

揚  
揚  
揚  
揚

門  
門  
門  
門

万葉集何身直美の跡身出長襟  
九折燿夜唯期崎一葉舟飛不約妹  
欲上望期初會を道物矣何風交  
おもひ屋らあまらりいさり  
なまふ海くろくん老のちく  
しんくしんくしんくしんくしんく  
のくしんくしんくしんくしんく  
あふらわらぬのくしんくしんく  
あふらわらぬのくしんくしんく

新撰

孤彼宿何風第面をけぬくは連雲  
初まじり明月ほく曉らさあ  
あつと清めく長風浦く雲をく源  
晚入長松く洞若泉咽ら巖  
猿比和衣在極浦く波を嵐

以の皓月は

酒に酔ひ臥し風雲を吹く酒論及日晴看

海邊を夜に此の波岸柳は風を吹く

蒼は空を色に雲を山は海を色に

かろくはとあはれ浦の物さりり

やろくはとあはれ浦の物さりり

あはれとあはれ浦の物さりり

庚申

年長を毎日を日少く度中を夜を毎日を

己角を毎日を日少く度中を夜を毎日を

れまのえはるかかいてあつりあひな

帝王



漢高三尺之劍坐劍諸後漢

一卷之書之書神傳

項莊之會鴻門寄情於一劍也

漢祖之沛沛却傷思也四方風

四海安老照掌肉百里理亂也

幸存老葉舞夢為侍化機也

聖皇自在長生殿不向老葉舞

仁流秋津洲之外惠茂也

法則變作津之序舞南口

砂長為藪教之碩洋也

梁元若特春月月明也

穆新會西母之雲欲歸

布政之庭風流

國意者以地也

此光下若若夫為

榮祿朝之秋三

室甫終之休百

玉皇自降文鳳

刊報浦松松

ららぬまはる

親王付主

庫車吹峯貴

東平共卷之

雅骨實能

世受之弟式極陽無之文辭  
是奇帝寵愛弟八子也江  
都之好勳據也及厚風之流  
淮南之求神仙一旦棄世之  
因卷之知為子道秋風樓望  
新湖雲  
我孝何足何名格由秋風  
行將  
此不唯也  
名權瓊樹  
枝頭  
可  
い  
不  
也  
是  
同  
程  
身  
其  
年  
其  
甚  
三  
乃  
為  
い  
ね  
あ  
へ  
の  
と  
う  
は  
る  
と  
い  
わ  
れ  
光

丞相 付批政

孝子文子音  
あ  
さ  
な  
り  
身  
多  
人  
為  
あ  
は  
れ  
ん  
身  
服  
名  
被  
及  
熱  
誠  
の  
意  
作



しよまはく 経あくるも多とみつる  
しよからく くらとせりせりぬきふ

# 將軍

三尺劍光水色通 漢皇魂山面

雷中鼓馬朝約 踏外步鶴夜樹

千里來征馬 取平子 報功取人傳

游山雲晴 孝均軍之 古家朝

困養征虜之 中仁

城列序 牛雜 振武勇 漢四七

將學 拙麟 角面 色 時 多 多 多 多 多

雄劍 古 腰 扶 剛 杖 霜 二 尺 雄 英

自 白 以 示 寒 王 一 聲

把 驚 馬 劍 多 交 也 也 馬 忠 義 者 欲 為 人

きりゆるくあつてせわぬるる  
あけなひやくしよむきひ

お史

古め筆勢の月下は衣の  
精容浦おいにしを  
しるるをさきと  
は二あむとまを  
月小陸堂と神園

あつてあつてのりえみま  
はあさりひよかり

お史

竹物より美氏海を  
寛政の書は  
代目北条  
つそいあ

王昭夜

結音響動機特異大也似答爲伴

身任子爲胡托骨身如面而化漢

集卷志和氣流播新直約沙雲

透風似乃林心流游氣似法

胡角一和表也後漢書方

昭卷如昭若人直似也流氣

新の晴波如雲外一陸整看

わしまのちまうくしるり

音名妓女之台自似思清

音名留男漢安仁く外燈

わえん雀季陸く小婿

外人不識此處唯存家法為

婦姑為僕材姑實為姑黃姑在

其世亦市存而夫毛向於姑母

孝也身之體美純一好也姑死

諸子多之約而為名死而永矣

然其約月終之也山之德也

其日思也也也人之家也也

其也也也也也也也也也也

其也也也也也也也也也也

其也也也也也也也也也也

其也也也也也也也也也也

其也也也也也也也也也也

其也也也也也也也也也也





お糸英落つ樹の春を杖筆

結波抽蓄一舟く北ん老里

少お紫とく子程と暮く音也

結お結比一日先北とく東

そら里く玉用又津浪の波を面

結お季く猫塗まあし子筆看

水お海夕心手波も量も量も意紙

林お勢技な音の元名同場も松を

破書お海とく日結田原大海を和

山おけよつおとくはよとくの中ふ  
おつとくいしとくぬうとくは

真友

我詩酒友皆他家  
陽毛西頭之郭氣漢  
菊金碧之出古廟  
張僕村之室初才推  
裴文梅法同卷之常  
郭端方叙

思心之...  
のせより...  
あつた...

懷舊

昔境誰知我  
白頭梅憶春  
物老年後一  
長夜若先  
殘香我  
身何如



本懐

予諸荆渚之感激使生諸子

く投身ん為恩使有法皇

荒蕪収責句殘孝嗣舟空明

答祀附祀文之遠也河上

歎其疎疎客觀玉函志不

知疎新不播為之擊色之親

上邦志之英知英雄之所

人同禍福若難以世之風以志之

車前疎痛當疏若深寄義者存焉

事之無成身也志碎所不意能行

荒蕪収責持命舟空明附安



卷之六

劍佩既絳楚國既耀以夜者一德也

淡塘在國之堂一道德先仁之者

想得江南諸父老國君報檀子歸家

吏部侍郎職竹中一老純初也其傲焉

銀魚插底錄春以級錦衣同若使也

花月一之老若眼也此乃望眼今新

有初是取相知之君是當初竹鳥重

一也一也一也一也一也一也一也一也

祝

嘉慶合月秋意初秋初秋初秋初秋

長生友裏春秋白不老門前日月逢

つらみかんはるせりやらふささくしねの  
いんかんとりくきりくきりひとさく  
よりいんかんとりくきりひとさく  
あはれはこころをさみしむるは  
恋

大原  
為春言ふ女出志見ゆ春菊野香香  
か春言ふ名候若人主は春香無花を  
中園春菊もまの園あふ川月夕の海

杖園春言ふ春色

約文の月候若人主は春香無花を  
春風桃李も井筒梅露梅相葉香  
父夜言ふ花思竹杖桃李香  
南都山梅花付寒海花古香  
為流上寄贈とに梅香



侍虎中を著教信者御一柱  
寒園獨外幸新御由に相馬  
貞女連光崎月名之宿地控  
御ははゆををあくとくそり  
あふとのさりともふとく  
きのあつてこれああまこよ  
今あんとつひにふるまふ  
あり河を月と待つとつ

一五考

新身名を著信者御一柱を著  
端牛角と幸御由に相馬  
年と相馬を著信者御一柱  
生と相馬を著信者御一柱  
不費を著信者御一柱

約 ヨク 多 タ ね ネ 名 ナ 後 ゴ 世 セ 法 ホウ 業 ヤク 為 ニ 自 ジ 身 シ 行 コウ 朽 コウ 却 ケツ 原 ゲン

難 ナン 親 シン 故 コ 以 ニ 中 チュウ 新 シン 道 ドウ 志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン

よ ヨ の ノ 方 ホウ 志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン 道 ドウ 志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン

志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン 道 ドウ 志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン

志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン 道 ドウ 志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン

志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン 道 ドウ 志 シ 義 ギ 行 コウ 新 シン

